

令和 4 年 5 月 19 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00365

研究課題名（和文）20世紀後半の中国におけるイコノテクストの研究

研究課題名（英文）Reading Iconotexts: Printing and iconography in China in the late 20th century

研究代表者

武田 雅哉（TAKEDA, Masaya）

北海道大学・文学研究院・特任教授

研究者番号：40216908

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は、20世紀後半の中国におけるイコノテクスト（画文一致）という概念に着目し、20世紀後半の印刷メディア（画報・ポスター・グラフ雑誌・連環画など）に見られる図像と文字テキストとの関連性を解明し、同時期の視覚イメージを、中華図像文化史の流れの中に位置づけようと試みるものである。

上述の印刷メディアは、とくに20世紀後半の中国において、民衆を教育するプロパガンダとしての役割を果たした。本研究では、それらが20世紀後半の中国人にいかなる視覚体験をもたらしたのかという観点に立ち、伝統的な視覚文化との連続性およびその変容の様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、イコノテクストの概念を用いることにより、中国の視覚イメージを世界的な図像学の座標軸に位置づけるアプローチが独創的なものである。毎年の研究結果は、研究誌『連環画研究』として発表した。同誌は全10号を数え、デジタルデータ化と索引の整理も完了している。また研究成果の一部を、研究代表者と分担者の共同編集、共同執筆により、書籍『中国文学をつまみ食い』『詩経』から『三体』まで』に発表した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we first focused on the concept of iconographic texts in late 20th century China and attempted to elucidate the relationship between iconography and text in late 20th century print media. Next, we situate the visual images of the same period within the flow of Chinese iconographic and cultural history.

These print media served as propaganda to educate the masses, especially in late 20th century China. From the perspective of what kind of visual experience they brought to the Chinese people at the end of the 20th century, this research project clarified the continuity with traditional visual culture and the aspects of its transformation.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学 表象 連環画 イコノテクスト

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

視覚イメージの研究は、我が国では1980年代より、従来の歴史研究や文芸研究を新たな視座からとらえなおす試みとして盛んに行われるようになった。中国における図像を西洋と比較し、その特徴を文化史的観点から論じたものに、中野美代子や杉原たく哉による一連の研究がある。海外においては、クレイグ・クルナスやウー・ホンの研究により、中国の山水画や庭園などに見られる視覚イメージが、中国人の観念を示すものであることが指摘された。それらは文字によって記された思想や物語ともつながり、重層的な世界観をあらわしている。本研究では、こうした先行研究を発展させ、ピーター・ワグナーやピーター・バークの研究で用いられる、「イコノテキスト」の概念を援用する。

イコノテキストとは「画文一致」を意味し、描かれた図像と文字テキストとの相互の関係性をあらわす概念である。識字率の低かった中国において、図像は文字を補完し、ときには文字に代替しうる情報伝達の役割を果たした。しかし、図像と文字テキストの相互の関連についての研究は、まだ緒に就いたばかりの段階といえる。とりわけ、明代の絵画や出版物に見られる挿絵を扱う研究に比して、20世紀の印刷メディアをこの視点から扱う研究は少ない。

それは、図像を絵解きのごとく具象的に解釈することが、伝統的な絵画理論において忌避されてきたことや、20世紀の印刷メディアが民衆教育の手段であると同時に、大衆的な複製物と見なされ、保存されにくく、専門的な研究の対象とされてこなかったことと関係している。

2. 研究の目的

(1) 学術的意義

本研究は、20世紀後半の中国における視覚イメージの生成と受容の様相を、印刷されたメディア(画報・ポスター・グラフ雑誌・連環画など)から読み解くものである。その核心をなすのは、描かれた図像と文字とは、いかに相互に作用しながら意味を創出したのか、という問いである。

本研究において着目するイコノテキストの事例は、大きく以下の4種類に分けられる。

ポスターに付されたキャプションや、連環画(絵物語)に付された説明文など、画外のテキストと図像との関係。

ポスターなどの図像の中に、直接文字が描き込まれたときの、画中のテキストと図像との関係。

吉祥を願う年画などに用いられる、図像によって文字テキストを象徴させるときの図像とテキストの関係。たとえば、中国語の発音が近いことにより、「蝙蝠 ビエンフー」(コウモリ)の図像で「遍福 ビエンフー」(福が遍く広がる)をあらわす例がこれにあたる。

文化大革命期のポスターなどに見られるように、政治情勢の変動にしたがい、特定の人物の図像に「×」印がつけられたり、文字が書き加えられたりする場合の、加工された図像とテキストの関係。

イコノテキストは、木版画などのように中国の伝統的な図像においても見られるが、本研究では、中華人民共和国の建国後、大量に出現した印刷メディアを対象とする。中華民国から中華人民共和国へと政体が交代した時期、図像にはいかなる物語性が込められ、それはいかに受容されたのか。こうした「図像のナラティブ」に着目することで、20世紀後半の中国における印刷メディアを、中華図像文化史の流れの中に位置づけることを試みる。

(2) 目的と特色

本研究の目的は、以下の通りである。

20世紀後半の印刷メディア(画報・ポスター・グラフ雑誌・連環画など)に史料価値が見いだされるようになった現在、その図像のみ、あるいは文字テキストのみを研究対象として扱うのではなく、図像と文字テキストとの関連性を解釈することを試みる。イコノテキストの視点をを用いることにより、図像がいかに「ことば」と関係を切り結ぶかに着目し、中華人民共和国のプロパガンダ・イメージの生成と受容の過程を解明する。

20世紀後半の中国における印刷メディアの通史を編み、同時期の視覚イメージを中華図像文化史の流れの中に位置づける。伝統的な視覚文化との連続性およびその変容の様相を明らかにし、現代中国におけるプロパガンダ・イメージとの接続についても考察する。

本研究の特色は、20世紀後半の印刷メディアに見られる視覚イメージを、図像と文字テキストの相互作用という視点から読み解こうとするところにある。中華人民共和国建国後の文芸は、1942年に提起された毛沢東による「文芸講話」の方針にしたがい、労働者・農民・兵士に奉仕するためのものとなった。こうした識字率の低い、広範な民衆に向けられた図像のもつ意味を、イコノテキストの作用から読解することが、本研究独自の試みである。

視覚イメージの生成および受容史の解明にあたっては、同じく20世紀後半に発展を遂げる児童文化や演劇・映像との関連を調査する。たとえば児童をテーマとする雑誌やポスター、および演劇・映像作品を紙媒体に移し変えた連環画などの印刷メディアには、中華人民共和国のプロパ

ガンダの特徴が顕著にあらわれる。その一つに、特定の視覚イメージがさまざまなメディアを横断してあらわれる「クローン」化現象を挙げることができる。こうした現象についても、イコノテクストの分析を通して世界的な図像文化および社会主義芸術との比較を行い、プロパガンダ・イメージの地域間の伝播やローカライズといった問題を考察する。

3. 研究の方法

本研究では、20世紀後半の中国における印刷メディアを、以下の3つのテーマに分けて分析した。研究会での検討を通し、メンバー全員がすべてのテーマに関わったほか、必要に応じ、歴史学や芸術学などの専門知識をもつ外部ゲストスピーカーとの意見交換を行い、研究の客観性を保つようにした。研究代表者は全体を統括し、円滑な遂行のための調整を行った。

(1) 図像のナラティブ

中国の伝統的な絵画理論は、説明的、物語的な絵画を忌避したが、実際には時代を問わず、中国には挿絵、絵解き、年画、画報など「ことば」と密接に結びついた図像があふれていた。図像と文字テクストの相互作用という観点をを用いることにより、20世紀後半のポスター、連環画、グラフ雑誌などもまた、中華図像文化史に位置づけることが可能となる。「図像のナラティブ」を読み解くことによって、中国におけるイコノテクストの通史を編む。

(2) 児童文化におけるイコノテクスト

識字率の低かった中国では、人民共和国の建国前より、識字運動と文字改革が提唱されていた。1950年代になると大規模な識字運動が展開され、1958年の「漢語ピンイン方案」の公布など、「文字の図像化」や「字音の視覚化」が推進された。20世紀後半の児童雑誌にも、こうした政治運動の動向は反映されている。対象を児童に向けたとき、図像と文字テクストはいかなる相互作用を生み出すのか。それらを成人向けメディアやソ連など先行する社会主義文化と比較することで、中国におけるイコノテクストの特徴を考察する。

(3) 演劇・映像におけるイコノテクスト

文化大革命期を含む1960年代から70年代にかけては、演劇およびその映像化作品が、紙媒体においても受容された。同時期の視覚イメージには、舞台上演じられる革命英雄の姿が、映画、ポスター、連環画など、メディアの種類をまたいで複製される「クローン」化現象を指摘することができる。演劇・映像を印刷メディアに移し変えたとき、増殖するイメージはいかに生み出されるのか、図像と文字テクストの相互作用から分析する。

年次計画として、資料調査、資料撮影（プロパガンダ・ポスターおよび児童雑誌の撮影）、撮影した資料のデータベース化、研究成果発表を実施した。研究成果として、研究会開催、研究誌『連環画研究』の発行とデジタルデータ化を行った。

4. 研究成果

研究期間中の各年度の成果は、以下の通りである。

(1) 令和元年度

研究会の開催、連環画の整理に関する作業、学術研究誌『連環画研究』の編集と刊行。

研究会は令和元年9月21日に開催され、ゲストスピーカーを含む研究者の間で、当該分野に関する活発な意見交換が実現した。連環画の整理に関しては、研究代表者の武田が、1950年代から80年代頃までの「養豚」をテーマとした作品を中心に作業を進めた。これらの研究成果は、学術研究誌『連環画研究』第9号に論考としてまとめ、令和2年3月10日に刊行した。

論考の中には、武田による清末から1950年代頃にかけての「養豚連環画」史を具体的な作品にそくしてまとめたものや、研究分担者の加部による1964年の東京オリンピックの際に中華人民共和国のスポーツ選手が中華人民共和国に「帰還」した事件の連環画化の過程を精査したもの、同じく研究分担者の田村による1958年の「大躍進」前後にかけて活躍したアマチュア作家・郭同江の連環画作品を分析したものなどがある。

そのほか、ゲスト執筆者として、瀧下彩子による漫画家・国画家の葉浅予と抗日漫画活動に関する論考や、中根研一によるカンフー映画を題材とする連環画に見られる西洋人表象に関する論考などが寄せられ、多岐にわたる題材を扱った成果論集となった。これらの成果は、いずれも20世紀後半の中国における視覚文化の興味深い様相を明らかにするものといえる。

(2) 令和2年度

研究会の開催、図像資料の整理に関する作業、学術研究誌『連環画研究』の編集と刊行。令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、対面での研究会開催や編集作業が実現困難になった。そのため、研究会は少人数での研究打ち合わせおよびオンラインでの意見交換によって代替し、学術研究誌の編集と刊行は、次年度に延期することとした。

研究打ち合わせは令和2年9月26日に開催され、研究代表者および分担者で今後の研究計画を話し合った。オンラインでの意見交換は、令和2年10月から令和3年3月にかけて、学術研究誌に発表予定の論文について、研究代表者および分担者、ゲスト執筆者の間で批評を交わした。

図像資料の整理に関する研究実績には、研究代表者の武田が、中国図像学（とくに中国古代美

術史・日中比較美術)の研究者である杉原たく哉(1954-2016)の雑誌連載原稿および論文を整理し、監修をつとめた『アジア図像探検』(杉原たく哉著、杉原篤子編、集広舎)の刊行があげられる。連環画の整理については、研究代表者・分担者おのおのが作業を進めた。

(3) 令和3年度

引き続き新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、対面での研究会開催は実現できなかった。しかし、研究代表者と分担者はオンラインで連絡を取り合うことにより、図像資料の整理に関する作業、学術研究誌『連環画研究』第10号の編集と刊行を行った。

雑誌編集の過程では、対面での研究会に代替する活動として、研究代表者および分担者、ゲスト執筆者の間で、オンラインによる原稿の回覧および意見交換を行い、研究成果の完成度を高めることを目指した。具体的には、4月から6月にかけて、初稿の提出と確認、7月から8月にかけて、相互の批評とそれをふまえた修正稿の作成、9月に完成稿の提出と確認を行った。

また、令和3年度は最終年度にあたるため、これまでの『連環画研究』の内容をデジタルデータ化し、著者・原稿索引を作成した。研究代表者の武田は、これまでの連環画および『連環画研究』に関連する活動を取りまとめ、整理し、発表した。

そのほか、研究代表者と分担者の共同編集、共同執筆により、書籍『中国文学をつまみ食い』『詩経』から『三体』まで』を刊行した。絵画、連環画、アニメーション、画報といった直接図像に関連する項目のほか、その他の文学作品、作家、文学史に関する項目においても、図像と文字テキストとの関連性に留意した編集、執筆者との意見交換を行い、本研究の成果を反映した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 武田雅哉	4. 巻 9
2. 論文標題 戦え、養猪姑娘（ヤンチュークーニャン） 韓梅梅 ! あるいは、張偉は家にこもってからどうなったか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 133-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 加部勇一郎	4. 巻 9
2. 論文標題 連環画『台湾剣客』（1983）を読む 1964年の東京オリンピックと台中間の物語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 67-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田村容子	4. 巻 9
2. 論文標題 農民絵師・郭同江の養豚連環画	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 武田雅哉	4. 巻 10
2. 論文標題 鼻を切りおとしたゾウ 続・養豚連環画を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 128-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田雅哉	4. 巻 10
2. 論文標題 そろそろ暖簾おろします	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 200-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加部勇一郎	4. 巻 10
2. 論文標題 新中国の武松たち 「虎退治」の物語を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 64-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村容子	4. 巻 10
2. 論文標題 となりのソ連人 中ソ友好連環画の「家族」たち	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 34-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 武田雅哉
2. 発表標題 戦え、養猪姑娘 (ぶたかいむすめ)! 養豚連環画に迷いたい
3. 学会等名 中国イコノテキスト研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加部勇一郎
2. 発表標題 『台湾剣客』（1983）を読む
3. 学会等名 中国イコノテキスト研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加部勇一郎
2. 発表標題 『小巷童年』について
3. 学会等名 自伝・回想録の会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村容子
2. 発表標題 農民絵師・郭同江の養豚連環画
3. 学会等名 中国イコノテキスト研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 杉原 たく哉、武田 雅哉、杉原 篤子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 290
3. 書名 アジア画像探検	

1. 著者名 武田 雅哉、加部 勇一郎、田村 容子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 266
3. 書名 中国文学をつまみ食い	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田村 容子 (TAMURA Yoko) (10434359)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	加部 勇一郎 (KABE Yuichiro) (30553044)	立命館大学・食マネジメント学部・准教授 (34315)	
研究分担者	藤井 得弘 (FUJII Tokuhiro) (80850015)	北海道大学・文学研究院・専門研究員 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------